

お薬のしおり

ぬり薬について

No.47 (H17.8)

東京医科大学病院 薬剤部

皆さんは、ぬり薬の正しい使い方について知っていますか？水虫やアトピー性皮膚炎など、皮膚の病気では必ずといっていいほどぬり薬が処方されますし、そうでもなくても虫さされの薬を一度は使ったことがあるのではないのでしょうか。ぬり薬はただ皮膚に塗ればよいという安易な考えで使用されることが多いようです。確かに食事を気にせず気軽に使用でき便利ですが、塗り方や塗る量が適正でない場合も見られます。そこで今回は、ぬり薬の正しい使い分け、使い方などをご紹介します。

ぬり薬には大きくわけて軟膏剤、クリーム剤、液剤（ローション剤など）があります。それぞれ特徴があり、症状や部位によってこれらを使い分けます。

軟膏剤：表面に油脂膜を作り皮膚の保護作用、かさぶた軟化作用があります。皮膚への刺激がほとんどなく、浸潤面、潰瘍面など傷のあるところから乾燥した部分まで広い範囲で使うことが可能で一番繁用されています。ただし、べとつき感があって衣服を汚すこともあり、活発に行動するお子様は嫌がる傾向があるようです。

クリーム剤：水分と油分をうまく混ぜ合わせたもので、薬剤を浸透させる作用が良好です。水分を含有していることから皮膚面から水分が蒸発することにより冷却作用を持ち、炎症およびかゆみを抑える作用もあります。主に乾いているカサカサ部分に使われ、べとつき感がないので、顔や汗をかきやすい首などに使われることが多いです。また、お子様には軟膏剤よりもクリーム剤の方が使用感はいいようです。



ローション剤：水やアルコールなどを用いた液状で、皮膚への浸透力が高く、軟膏剤、クリーム剤の塗りにくい爪の間や、頭皮などに使用するのに適しています。さらっとした使用感で、広範囲に簡単に塗ることができますが多少の刺激性を持つものもあり、傷口のある場合にはあまり適していません。

ぬり薬を塗る時には手をきれいに洗ってからにしてください。打ち身、筋肉痛などに使われる消炎鎮痛剤はよく擦り込むと吸収が良くなり効果も高くなりますが、通常は患部に薄くのばすように塗るのがよいでしょう。あまり力を入れて擦り込むと摩擦によってかゆみを誘発したり、症状を悪化させる恐れがあります。また、患部の具合によってはガーゼに少し厚めに伸ばして使用する場合があります。ステロイドのぬり薬は外用と言えども内服や注射などと同じように副作用を考えなければならず、あまり塗り広げずになるべく個々の湿疹のみに塗るようにしてください。

1日に塗る回数ですが、一般には1日2~3回塗ればよいでしょう。最近は1日1回でよいものもありますので、医師の指示に従って下さい。皮膚が清潔で血行のよいお風呂上りに塗るのが一番効率よく薬剤が浸透します。

そして使った軟膏は直射日光の当たらない涼しい所に保管しましょう。また、チューブの先や容器のふたなどは常に清潔を心がけてください。調査の結果、チューブタイプの口の部分に93%の汚染が見られることが報告されています。クリームは水分を含んでいることから軟膏に比べ汚染されやすいため、薬を手取る際、綿棒を使用するのもよい方法です。

薬の効果を十分に発揮するためには、塗布する部分を清潔にしてから塗ることを心掛けましょう。また、ぬり薬といえども当然副作用が生じる可能性があります。ぬり薬の主な副作用として過敏症があります。これは刺激感、かゆみ、皮膚が赤くなるなどの症状が出るものです。このような時は塗るのを中止して早めに医師の診察を受けることをお勧めします。

薬を安全に使用するため、また副作用を防止するためにも、1日の使用回数や量、塗る部分など、初めに薬剤師、医師に確認してから使用しましょう。

